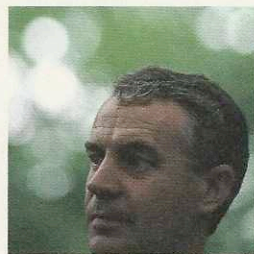


型を超えるために、型を確立する

尺八は瞑想的な楽器である。竹という自然の素材を活かした形状、吹く人間の情感をダイレクトに伝えやすい演奏形態、何より、そこから響く音色が、いかにも無心であるとか、無情といった言葉を想起させる。一言で言い表わすなら、極めて日本的な楽器というイメージだ。ゆえに、日本人の心を理解できない外国人には、尺八は難しさに違いない……多くの日本人は、そう考えてしまう。しかし、そんな考えをクリストファー・遙盟さんは、即座に否定する。「日本には、3つの神話がある。まず、単一民族だということ。次に、日本文化はユニークだということ。そして3つ目が、その日本文化は外国人には理解できないという神話。最初の対しては、アイヌの存在だけで間違いを指摘できる。2番目については、最後の、理解できないという人は、自分が理解できないから、ましてや外国人には、と思っただけ。自分の無知さを外に託しているに過ぎない」彼の尺八との付き合いは長い。先日、早稲田大学の交換留学生としての初来日から20周年を記念して、コンサートを開いたばかりである。それまでフルートをやっていた彼が、たまたま日本に来て、後に人間国宝となる山口五郎という有名な尺八の先生と出会い、そのことが彼に今の道を歩ませることになった。「それは、とてもラッキーなことでした。尺八を習おうとしたら、その世界の第一人者に師事できることになったのだから」

自分の楽器と出会えたという思いが、彼を包む。世界中に存在する笛の中で、尺八はもつとも構造が単純であるがゆえに、制限がないのだという。5つしかない穴も、その閉じ方だけで、広い音階をカバーできる。唇を使い、吹き方を変えることで、色々な音色を引き出せる。尺八は、彼にとって、自分を



クリストファー・遙盟、ブレインズ
1951年、テキサス生まれ。
72年早稲田大学の交換留学生として来日。
尺八と出会う。山口五郎に師事。
以後、いったんアメリカに戻るが、
75年に再び来日し、本格的に尺八を学ぶ。
その間、82年に東京芸術大学大学院修士課程修了。
84年、山口師より号「遙盟」を授かる。
現在は、公演活動の他、朝日カルチャーセンターで
尺八講座も開いている。
CD作品として、遠なる笛他がある。

表現するに足る自由な楽器であった。

「と同時に、尺八のもつ精神性に魅かれたのも事実です。実際、尺八は楽器であるとともに法器ともいわれ、かつては虚無僧が尺八を吹きながら諸国を行脚した。座禅ならぬ吹禅という考え方ですね。最初は、そうした禅としての尺八にも興味をもって取り組んでいたのですが、しだいにどうでもよくなってきた」

それは何故なのか。彼は、禅を超えると禅ではなくなるといふ。何かが体現するとそれを表わす言葉が必要としなくなるとも。

「日本の芸術は『型』に厳しいと言われます。しかし、『型』をマスターすると、そこから自由になれる。たとえば、俳句でも五七五が型として示される。でも、名人の残したものには五七六の名作も多い。師匠である山口五郎は、型を壊すのはいいが、型がしっかりしていないと壊す意味がない、と教えました」

最近、尺八も純粹に楽器としてジャズなどに取り入れられることが多い。そんな、古典をやらずに、いきなり作られたモダンには、彼は物足りなさを感じるという。しかし、彼自身、即興演奏を含め、新しい試みに挑戦している。

「古典は、僕にとって修行だと思ふ。自分を磨く手段。古典の型の中に自分を託すことに意味があるんです。人は、生まれてから死ぬまで、自分を磨く必要がある。そうした修行に身を置くと、それを吹禅などと取り立てて呼ぶ必要など感じない」

だからこそ、小鳥の声を聞いても、水泳をしていても、彼にとっては練習になるのだ。そして、彼には型をまったく必要としなくなる究極の姿が、予感として感じられるという。

「尺八を吹いていると、あるとき、自分も吹かれています。竹という空洞を僕が吹き、僕という空洞を何が吹いている、と」

それを神と呼ぼうが、無と呼ぼうが、彼にはどうでもよいことなのである。

生き「型」の発見



Christopher Blasdel